

フレーベルの研究 I

津 幡 智

1. はじめに

フリードリヒ・フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel) は、ドイツの教育家である。

彼は23歳で教育の道を偶然に歩み始める。幾つもの職歴を重ねた後、教育に自己の天職を自覚し、彼の理想実現に向けて全力投球して行く。

1839年6月1日、ブランケンブルクに「幼児教育指導者講習科」を創設する。これらの幼児教育指導者講習生に教育実習させるため、6歳以下の幼児を約40人集める。そして「遊びと作業の教育所」(Spiel=und Beschäftigungsanstalt)を付設させる。この教育所にふさわしい名称について思案の折り、1840年の春のある日、親友のミッペンドルフらと同行してシュタイガー山の山路を通りかかった時、眼下に見下ろした雄大な風景が大きな花園のように柔らかな日の光に包まれ輝いているのを見て、彼は即座に叫ぶ。「みつかった。その名はKindergarten (幼稚園) でなければならぬ」。こうして、その年の6月28日よりその「遊びと作業の教育所」は「幼稚園」と改名される。これが世界で最初の幼稚園の誕生であった。思えば、フレーベルがこの道に至るまでには、かなり長い道乗りであった。彼はすでに58歳になっていた。フレーベルが1826年(44歳)に彼の教育理念を著した「人間教育」を自費出版してから14年の歳月が流れていたし、彼の教育論を実践させるために考案された教育遊具の制作が「児童のための作業教育所」で1837年(55歳)に始められてから10年間の歳月が過ぎ去っていた。これは、フレーベルの強固な信念と忍耐とで彼の内的必然性から生れた理

想を現実に具体化して行った足跡であったと言える。

処で、私がフレーベルに出会ったのは、今から数年前のことである。大阪芸術大学の図書館で「フレーベル教育学への旅」荘司雅子著の題字の「旅」という文字に目が止まり、さらに、開いた本の冒頭を飾るフレーベルの詩であった。

わたしは次のような人間をつくりたい。
自らの足は神の地なる自然の中に根を下ろし、
その頭は天にとどき直感もて天を読み、
その心は地と天との両方を、
つまり地なる自然の形象豊かな生命と、
天の明澄や平和とを、
神の地と神の天とを一つにする、
そういう人間である。

私はこの詩の毅然とした明快な響きに、強い衝撃を受けてフレーベルに魅きつけられた。そして、私はフレーベルの「人間教育」と、フレーベルの教育遊具である「恩物」にも出会った。今回、この「フレーベルの人間教育学の旅」からフレーベルへ入門し、この「恩物」とは何であるのかを認識し、今日の遊具のあるべき姿を論じる。そこで、これから論じるにあたり、荘司雅子氏のフレーベルについて纏め、それを入門編とする。

2. フレーベルの生涯

1782年4月21日にドイツ(旧東ドイツ)の片田舎にあるシュヴァルツブルグ・ルードルシュタット、オーバーワイスマッハ村において牧師ヨハン・ヤコブ・フレーベルの六人目の子として祝福されて誕生した。しかしなが



1-20歳のフリードリヒ・フレーベル

莊司雅子「フレーベル教育学の旅」より

ら、その幸せは束の間で、翌年の母エリーゼは生後9カ月の彼を残して無情にも他界する。牧師の父は、約5000人の信仰者の魂の救済に多忙な活動家であり、子供達の世界や教育に関心を持つ余裕もなかった。

やがて、彼が4歳になった時に父は再婚する。この2度目の母に最初のうち、彼は可愛がられて幸せに包まれる。しかし、その幸せは、またも束の間になる。2度目の母に男の子が生まれるや、彼はまた淋しい子となる。この出来事は、彼にやり場のない戸惑いと心に深い傷を与える。フレーベルはこの淋しさをチューリングゲンの森に入って自然達と語らうことで慰めた。彼は以前にもまして、自然を愛するようになる。この人間不信は彼の孤独性をさらに増し、内向的な性格を強めていった。フレーベルの幼年期は人並みの愛に満ちた暖かな家庭の空気を決して味わうことのないものだった。また、厳格な父は家庭内でも規律ある宗教生活を家族そろって過ごさせたため、フレーベルは、この父から宗教的に多大な感化を受けたのである。

1792年、10歳になったフレーベルは亡き母の兄弟でシ

ユタットの教区監督していたホフマンがフレーベル家を訪問して、しばらく滞在したのを機会としてこの伯父の家にあずけられることになった。温和で親切な伯父は彼を男子校に行かせ、堅信礼までの4年間を養育した。フレーベルにとって、この生活は快活で充実した少年期であった。ここでの生活が終り、14歳になったフレーベルは、いよいよ仕事に就く時がきた。彼は好きな山や森から農業の研究をしていける仕事を考えていたので父の知人、ヴィッツの所で林業、幾何学及び測量師を学ぶことになる。彼は15歳でヒルシエンヘルク地方の林務官見習いとして職に就く。多忙なヴィッツは彼に何も教えなかったのが彼は事務所にある本で自習した。2年間の見習い期間も過ぎたので、向学心の旺盛なフレーベルは長兄トラウゴットの勉強していた、イエナ大学哲学学科において1799年10月22日入学した。処が兄に授業料を貸したことから学資が続かなくなり、2年間で大学を去る。そして、家に帰ったが父はヒルトブルクハウス地方に農場を持っていた親戚の農場で働くことを薦めたので、フレーベルはそこで農夫として働き、農業実地する。

1802年2月10日に父は死去する。この年の4月、20歳になったフレーベルはバンベルク地方の森林局書記となる。その後、この地方に行政改革があり、政府任命の土地測量技師に転職するが、より確実な生涯の職を求めて「一般ドイツ新聞」に求職広告を出して職の遍歴を重ねるうち、彼は建築家を志すようになる。丁度その頃、彼にやさしかった伯父ホフマンが亡くなる。そこで、フレーベルは熟慮の末、予てから秘かに決意していた建築家を目指すために、わずかながらの伯父の遺産を持って、1805年4月にフランクフルト・アム・マインへ行く。ここで建築家としての就職先を捜すある日、友人の誘いで会った、ペスタロッチー学徒のグルナーG. A. Gruner (1788~1844年) 校長から教師の欠員に是非と要請され、この偶然に迷ったあげく模範学校(小学校)の教師となる。この時フレーベルは23歳であった。これが、フレーベルの教育活動への第一歩である。この当時、ペスタロッチーの名声はヨーロッパの教育界を風靡して、この学校の校長や次席教師もペスタロッチーの門下生でした。このペスタロッチーの教育に感化されたフレーベルは早

速、スイスのイヴェルドンにペスタロッチーJohann Heinrich Pestalozzi (1746~1827年)を訪ね、約2週間の実地見学をし、彼を師事した。これらの体験を通して、フレーベルは初めて自己の天職は教職であることを自覚する。

25歳になったフレーベルは当時、教師のかたわら、フランクフルト近いオーデのフォン・ホルツハウゼン家の3人の子の家庭教師もしていた。彼は、ここでルソーの「エミール」の教育のようなものを計画して3人の子と共同生活していた。彼はここで人間教育について、教育とは何か、基礎教育とは、理想の教育とは、また人間の本質とは、と根本的な問題が彼の問題の中心となる。これら諸問題を解決するには、彼はペスタロッチーから学ぶべきだと思い立ち、3児をつれて、ペスタロッチーを再訪問する。それから2年間滞在する。この間ペスタロッチーの教育法を研究していくうち、礼讃者となって行くが、その教育法に飽きたらず、また、この学園内にトラブルが発生し、表面化（ニーデラーとシュミット両氏の対立）してきたこともあり、フレーベルは3人の子を両親の元に戻し、再び大学で自然科学と言語学を研究する決意をする。

1811年、29歳の彼はゲッティンゲン大学に入学し、当時流行していた統一の思想を自然の鉱物や結晶の世界に予感し、自然研究する。その後、彼はベルリン大学の教授で結晶学の権威者ワイス教授の名声を耳にするや、1812年10月ゲッティンゲンを去り、ベルリン大学へ移ってワイス教授のもとで鉱物・地球構造学・結晶学・物理学などの研究をする。ベルリン大学は当時の愛国心の燃える青年達の精神的揺らんの舞台であった。

1813年の春、ナポレオンの大軍がロシアで大敗するや久しく抑圧されていた重く暗い束縛から解放への憧憬は祖国ドイツの自由を仏軍から勝ち取る戦争へと駆り立てていった。かつてのドイツ帝国の民族意識が高まり、国家建設へとロマン主義の精神に若人は熱烈に燃え上がり、プロイセンの義勇軍を組織する。諸大学の講堂は空になる。格闘的でないフレーベルも愛国心に燃えてリュッツオ軍の義勇軍に参加し戦う。この戦争によって国民意識を自覚し、同時に国民教育の必要を痛感する。また、こ

の戦火の中で生涯の友となるランゲタールとミッデンドルフと知り合った。ドイツ軍勢の勝利で戦争は終わる。1814年7月義勇軍が解散されると、フレーベルはワイス教授の紹介でベルリン大学付属鉱物博物館の助手の職に就く。ここでの学生生活や時代の思想に影響を受けて彼は人間教育に関心が益々高まっていく。その頃、突然にフレーベルの友達の中で特に信頼していた兄クリストフが1813年の戦争で病兵の看護に当たった際、チブスに感染して不幸にも妻と3人の子を残して死去する。その3年後、未亡人から、この3人の教育に関する相談の手紙がフレーベルに届く。このことがきっかけとなり、フレーベルは、ワイス教授の懇切な引き留めやストックホルムの大学から招かれた教授職の栄誉も捨て、兄の遺児への教育を天与と心から喜びベルリンを去る。彼は、グリースハイムへと向かう途中立ち寄ったハルツ山中のオーステルオーデで工場経営している兄クリスチンにも2人の息子の教育を任され、わずかの資金援助を得る。そこで、彼は5人となった子連れてグリースハイムに来て彼の教育は小さな農家を借りて始まる。

1816年6月28日(35歳)に「一般ドイツ教育所」Die allgemeine deutsche Erziehungsanstaltの名称で彼は待望の教育活動に再び専念する。そして間もなくフレーベルは彼の親友のミッデンドルフとランゲタールに、このことを手紙に書き、彼の理想実現への事業計画に賛同し、協力してくれるように願った。暫くして、1817年4月にミッテンドルフがランゲタールの幼い弟を連れて参加したのでやっと6人の子になる。9月にはランゲタールも来る。翌年6月には学園の家庭の事情でカイルハウのさらに小さな農場へ移転を余儀なくされる。そこで「カイルハウ学園」となる。そして、皆の努力の結果、この学園の生徒数はわずかながら徐々に増えてくる。この頃になってフレーベルは、ようやく生涯の伴侶を考える。この時、彼の脳裏に蘇ったのはベルリン大学時代知り合った女性ヘンリエッテ・ウィルヘルミネであった。彼は彼女との結婚の希望を手紙に書く。彼女はフレーベルの申し出を快く受ける。彼女は両親の反対にもかかわらず、ベルリンを去る。

1818年9月20日にフレーベル(36歳)とウィルヘルミ

ネ (38 歳) の 2 人は結婚する。この学園に彼女が加わるや、学園の内面生活は充実し、学園は次第に大きくなるが、返ってフレーベルの期待に反する方向へ進展して行った。(この学園は1825年の最盛期に56人となった。)1826年(44歳)、カイルハウ学園は財政難に陥る。このきっかけは、これより先の自由戦争当時、愛国運動に参加した青年グループが、ドイツ諸連邦の統一をはかる企てを立てて反政府体制運動をした、この改革運動に参加していた危険思想犯の一味がカイルハウ学園の教師(ミッデンドルフの甥のヨハネス・バーロップである。)の中にいることからカイルハウの教育法に対してまで政府は嫌疑をかけ弾圧してきた。この誤解を解くため、この年フレーベルは「人間教育」を出版する。しかしながら、この本は難解すぎるため一般の人々には理解困難で、同じ興味を持つわずかの識者のみ、本を手にしたに過ぎなかった。この事は、生徒の親に不安を与えて学園を去る生徒が相次ぎ、貴族社会から来ていた資金の豊かな生徒も退学し、1829年には生徒が6人になる。経営難は益々深刻になる。このことは、フレーベルの教育活動の持続が困難な状況になる。そこで彼は次々と手を打つ(ヘルバの国民学校計画、スイスのワルテーゼ学園、ヴィルザウ学園)が、ことごとく政府と教会側(旧教徒)との圧力とで押し潰されて行く。彼は苦悩の末、カイルハウ学園の内情を一般の人々に理解させる事が得策であると結論し、滞在中のスイスのヴィルザウで1833年6月「人間教育概要」を公刊する。次いで同年の秋に生徒の作品展を開催し、また運動競技も開催して人々を参観させた。それらの事は、人々を心からフレーベルの教育法に賛同させた。そこで人々は、逆にフレーベルを反対する僧侶らの立ち退きを命じる程の勢いになった。

1835年5月末、新教の盛んなスイスのベルン州の政府の招きで、かつて、ペスタロッチーが活動したブルクドルフの孤児院長となる。院長の職務と兼務して、教師教育講習会や孤児院内に附属国民学校を設置し、これを外部の一般児童にも開放する。

1836年1月1日(54歳)、彼は「1836年は生命の革新を要求する。」と言う論文を発表する。

1836年5月14日、フレーベルはウィルヘルミネ夫人の

健康状態の事情から孤児院を辞職する。カイルハウに帰る途中ベルリンに数ヶ月滞在し、9月20日にベルリンを去ってカイルハウに帰る。

1837年1月16日、ブラッテンブルクに「児童のための作業教育所」を開設する。この「幼児と青少年の作業衝動育むための学園」を5月1日を水車小屋の彼の住まいから「商館」と呼ばれる事業所の建物へ移し、彼の計画に従って教育遊具を制作を開始する。

1838年(56歳)「自己教授と自己教育とに導く直感教授の学園」を創設する。

1839年5月13日、フレーベルの最愛のウィルヘルミネ夫人、59歳で病死する。

1840年6月1日、この学園で幼児教育指導者第一回講習会を開き、遊びと作業のための学園を付設する。「遊びと作業のための学園」に「キンダーガルテン」と命名する。クリューズィー「女性の使命」を刊行する。

1844年(62歳)、西部ドイツ地方を旅行し、幼稚園教育の宣伝運動をする。母のための教育書「母の歌と愛撫の歌」を発行する。第三遊具の使用法の案内書を刊行する。

1848年、ルードルシュタットでフレーベル主催の一般ドイツ教育者会議が開催。秋ドレスデンに保母養成講習会を開催する。

1849年、リーベンシュタインへ移る。ハンブルクで活躍する。彼はマーレンホルツ・ビューローM. Bülow 男爵夫人(1810~93年)とリーベンシュタインの温泉場近くの野原で子供と遊んでいた時に出会う。この村の人々に彼は「馬鹿爺さん」と呼ばれていた。

1850年、ハンブルグからリーベンシュタインに帰る。5月、ビューローマイニンゲン公より、マリエンタールの公の別荘を譲り受けここに住み、シュワイナに保母養成所を設置し、幼稚園も付設する。

1851年6月に長年に渡り、彼の身の回りの世話をしてくれていたレヴィン・レイゼ(36歳)と再婚する。「F・フレーベルの事業のための雑誌」発刊。8月7日、プロイセン政府は幼稚園禁止令を發布。リーベンシュタインでの教師の会議で禁止令に対して弁明、抗議。

1852年6月21日(70歳)マリエンタールで病死する。彼の理想は志なかばで成就されることなく、シュワイナ

の丘の墓地で永眠する。その墓の形態はフレーベルが幼児の遊具として考案した球と円柱と立方体を積み重ねた形態で、その墓碑には「さあ、私達の子供らに生きようではないか。」の彼の標語が刻まれている。フレーベルと夫人との間には子がなかったがキリストの教え「神を畏れ、人を恐れず、人に仕えよ」を全身全霊で勤め果たして、自己完成に導かれていったと思われる。



2-シュワイナにあるフレーベルの墓 PHOTO: T. ISHIBASHI
荘司稚子「フレーベル教育学への旅」より

3. フレーベルの教育思想

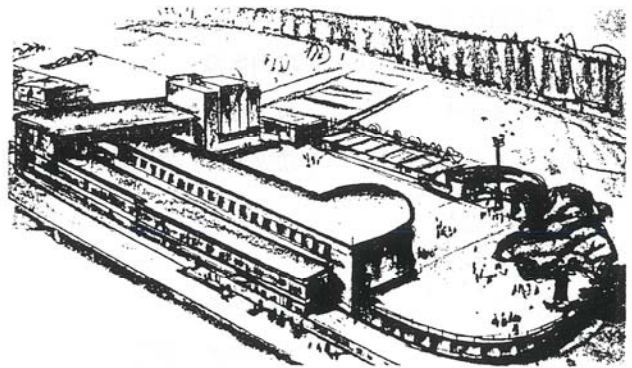
フレーベルの思想は彼の生きた時代の宗教、哲学の分野ではフィヒテやヘーゲルが活躍し、文学分野ではゲーテやノヴァーリス（「人間の内には、注意深く育て上げさえすれば、不思議な活力にまで伸びうる一つの力がある。」）が活躍したドイツ文化の花が咲いた頃である。

フレーベルは彼らの影響を強く受けながら、彼独自のものへと形成されて行く。これは彼自身の自己存在の存続への闘いであったと思う。特に、多大な影響と暗示を与えた恩師の一人と言えるペスタロッチーがフレーベルに贈った言葉「人は自己の目的への道を、思索の炎と言葉の花火とを持って切り開くのである。けれども彼はただ沈黙と実行とによってこの道を完了し、また自己をも完成する。」に彼は共鳴している。ここで、フレーベルの思想を理解するにあたり彼に迫害を与えた時代背景に視点を置く。フレーベルの生きた18世紀から19世紀のドイツは歴史的、政治的、社会系、また思想的にも激変期で、一大転換期であった。1638年に終了した30年戦争によってドイツ帝国の国力は衰退し、崩壊して大小300以上の小邦国に分裂しての戦乱時代、この中でオーストリアとプロイセンの2大強国が台頭し、対抗の結果、オリーバー条約によって、1660年にプロイセン公国はポーランドから離れ、1701年にブランデンブルク選帝侯プロイセン公フリードリヒ一世プロイセン王の称号を得てドイツの大国として支配するようになった。第3王のフリードリヒ2世(1740~1786年在位)によって19世紀におけるドイツ統一の基礎が築かれたが、その統一はドイツ民族の為のものではなく王権と支配階級の利権であり、人々に絶対服従を強制した。16世紀初頭に高まったドイツ国民意識が再び復活したのはフランス大革命とナポレオン帝政に伴う戦乱にあってからである。フレーベルはこの困難な時代に彼の夢を成就することができず、この世を去ったが彼の思想は今日でも生きていていると思われる。また、フレーベルは時代から多くの迫害を受けたが、返って彼はその苦境のどん底のさ中に、人類教育史上特筆すべき「人間教育」**Menschen—erziehung**を公刊し、また、彼は56歳の時にブランケンブルク Blankenburgに「自己教授と自己教育とに導く直観教授の学園キンダーガルテン」を創設し、幼稚園（世界で初めての幼稚園と言われている由縁である。）の基を開いた。彼の教育思想は単に幼児教育のみならず、教育全般におよぶ人間教育である。その思想を一貫しているものは、ドイツのロマン主義の哲学であった。彼は宇宙を大きな有機体とみなし、その根底には統一者としての神が存在しているとする生命合一

の思想である。その原理を教育へ発展させた。神から万物は生まれ、その神によって万物は支配されている。万物には神の働きが存在する。つまり、万物の中に神の本性が宿っている。この神の本性が万物の本質である。この本性を現わす事が万物の地上での使命である。人間の地上における使命を果たさせるように導くことが教育である。神は絶えず創造し生産的に働いており、働かぬばならない。教育はこの神性を幼児期から発揮するように計画しなければならない。かくて彼の幼児教育の思想は創造的行為によって神の本質を認識することである。フレーベルに従えば、人間のこの創造的行為によって創造されたものが我々の言うところの文化である。そのために彼は理想的な遊具として恩物 Gabe を考察したり、母性教育を強調した。このことによって幼児や児童の創造力を鍛えようとした。フレーベルは子を育てる母親の教育の必要性も痛感し、母性教育のための特色深い教育書「**母の歌と愛撫の歌** Mutter- und Koselieder (1844年) を出版する。その書は、単に自然的母性愛による保育ではなくて、母親が反省と自覚を通して、その自然の生活において、その自然の生活の底を流れ、その自然の生活を成り立たせるものを感じ得るように導くための書であった。このようにフレーベルは自然の生活において超自然的なものを感じ得させる手段として、恩物や詩や歌を創作し、それを世の保育者と幼児に与えた。ここに彼のロマン主義や象徴主義の立場を看取することができる。要約すると、フレーベルの教育思想は、人間教育、母性教育、幼児教育、宗教的文化教育に一貫して流れている。教育の方法においては自己活動、連続発展、個性化、社会化、直感、労作、生活、体験などの一連の新教育の原理に立脚している。彼が現代の心理学や教育学の先駆者と呼ばれるゆえんは進化論の唱えられる以前に、すでに今日の発達心理学を先見しているところにある。教育で言えば、現代の作業主義や行動主義の教育を先見していることである。これは、アメリカの教育学者デューイによって、フレーベルの教育原理や方法は大学教育にまで発展し、適用されていた。

処で、フレーベルの思想を知る手がかりとして、異なる視点から見る。彼の没後、1924年の始めのドイツで一

つのアピールが出版物に載った。「1927年6月21日はフレデリック・フレーベルの没後75周年を迎える。世界中からの訪問者がフレーベルの墓のあるシュヴェイナと彼が最後に働いたリーベンスタイン近くのマリエンタールへ巡礼に訪れるであろう。しかし、どちらにもフレーベルの考えを実現した建物がない。」フレーベルの影響は、フレーベル・ハウス、幼稚園、ディケア・センター、子供のためのレクリエーション・ホーム、青年センター、子供の家、母親達のための学校、これらはフレーベルの教育を实践する為の建物に現わすべきであった。この事から、フレーベルの建物「子供達の偉大なる友であり、人類の教育者のため国家的記念碑」が計画されることに成った。この記念碑になる建物の設計を、フレーベル協会理事シュミット・スポナーゲル女史は、経済省アドバイザーのデベル氏の提言でグロピウスに依頼することになった。……この建築家ヴァルター・グロピウスは、ヴァイマル共和国で1919年(～24)において**パウハウス**(1919～24年)を創設し、以来、その学校の校長をしていた。



3-グロピウスの設計による「フレーベル・ハウス」の構想図

この「フレーベル・ハウス」は建設されたのかは判らない。今日、グロピウスの作品としての記録作品の中から発見できなかった。とにかく、この記事はフレーベルの教育者としての当時の歴史的意義を立証するものであるし、この設計内容からもフレーベルの思想が十分に理解できる。また、彼の建物に関して1873年にビューロー夫人の尽力でベルリンに「ペスタロッチー・フレーベル・ハウス」が建設されて今日に至るまで保育所や幼稚園の保母や教師の養成が、この建物で行なわれているとのことである。

4. フレーベルの「人間教育」

彼の主著書「人間教育」の項目を一覧する。

基礎論

哲学的基礎
万物の本質と使命
教育の意味と目的
教育法の原理
幼少年の理解
命令か追従か
自然の法則に従え
しつけの問題
教師と生徒との関係
教授の必然的な一般公式
教師の役割

教育は受胎の時から
両親教育・家庭教育
乳幼児の教育
乳児と云う言葉の意味
子供の最初の感情を大事に
苦悩に耐えうる訓練を
宗教心の芽生え
宗教心や道德性の育て方
連続発展観
勤労と宗教
生産活動と勤労への教育

幼児としての人間

幼児の外界認識
幼児の感官の発達
四肢の発達
幼児期の始まり
——人間教育の始まり
幼児期の重要性
言葉による事物の理解
幼児期の食物

幼児期の衣服
言葉による事物の理解
自立心と探究心
描画活動
描画指導
数の概念の保育
幼児教育への父親の役割

少年としての人間

少年期とは
教授の目的
家庭生活の必要
少年期の構成衝動や作業衝動
少年期の遊び
児童遊園地の提唱
屋内における作業場

物語や昔話
少年の悪の問題
人間の本性は善
悪の起源と治療法
少年の欠点や罪悪の責任者は
悪いのは教育者

生徒としての人間

学校とは何か
学校は何故に必要か
学校とは何か
学校の目的
教授の目的

主要な教科について
宗教及び宗教教育について
宗教とは 宗教教育
自然科学及び数学について
自然と宗教 自然と芸術

教師とは何か
少年の自然研究
自然は一つの有機体である
自然界を構成する原理としての「力」
植物界における数関係
数学について

言語及び言語教育について

言語と宗教及び自然との関係
言語とは何か
言語は人間の精神の産物である
言語のリズム
書くことについて
読むことについて

芸術及び芸術家について

芸術と宗教・自然・言語との関係
芸術の種類

家庭と学校との連絡及び教科目について

一般的考察

個々の教科についての考察

宗教教授
身体訓練
自然と外界の観察
詩と唱歌の学習
言葉の練習
空間的な表現の練習
網目の板に図を書く練習
色の理解
遊び
お話
遠足と散歩
算数の学習
形の学習
話し方の練習
書き方の練習
読み方の練習

全体の概観と結び

この内容については次回に述べる。

フレーベルの「人間教育」に対する思想の深遠さと理論的体系化とその実践方法である教育遊具は物作りに携わる私に造形原理を再確認させ、その為に彼の思想をきちんと理解すべきと云う思いに駆り立てたのである。

5. フレーベルの教育遊具「恩物」

フレーベル没後、フレーベルの崇高偉大な理想はビューロー夫人の献身的な努力の啓蒙活動によってヨーロッパ各国に幼稚園が普及する。

1855年フレーベルの教え子カール・シュルツ夫人はアメリカに渡り、ウィスコン州のウォータータウンにアメリカ最初のドイツ語「幼稚園」を開設する。

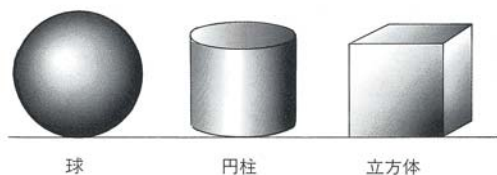
1860年、エリザベス・ピーボディ女史がボストンでア

メロカ最初の幼稚園を設立する。

1876年、フレーベル死後、24年の歳月を経て、明治9年11月14日に東京女子師範学校（現在、お茶の水女子大学）に日本最初の幼稚園が付設する。ドイツで直接フレーベルの教えを受けた松野クララ女史の指導の下で始まる。当然フレーベルの遊具も使用された。この遊具の命名は当時、幼稚園設置の機運を促進する運動に参加していた関 信三が「恩物」と翻訳する。彼はフレーベルの遊具は幼児の中に秘められた神性を伸ばすために神から与えられた贈り物と言う宗教的に深い意味を感じて付けたと憶測されているが、これは、やはり明治と言う時代が名付けた名だと思う。フレーベル遊具の目的は幼児というものは、もともと絶えず何かを表現しよう、創造しようとする衝動を持っているとの見解から、表現するためには何か触れる具体的なものがある、何か材料がある。その具体的なものと材料を幼児に提供するためである。これは教育的な観点から考案されているので「恩物」と云うよりは、やはり「教育遊具」と云える。

フレーベルの教育遊具は、彼の墓の形態に象徴されている第二遊具の球と円柱と立方体を基本形態として諸々の形態の組み合わせから生活形式の模擬や美的形式や数を理解するための認識形式等にシステマティックに発展し、展開される学習能力を持つ木製の積木玩具類である。

フレーベルの第二遊具



今日の幼児時代においては、一時的に使用され、捨てられてしまう遊具の一つである。マルチメディア社会の現代では、幼児は家庭用テレビゲーム機が遊具の代表であり、このファミリーコンピュータ（ファミコン）は幼児に飽きられることなく、また中高年になっても継続される。このゲームの遊戯性は年齢層が厚く高齢者にも支持され発展の勢いがとどまらず、現代生活の中で遊戯に関わる余りにも多く様々な問題を引き起こして社会問題

にさえ成って来ている。これらのデジタルメディアの巨大化は我々の生活を脅かし、今や我国の基幹産業の支流にも喰い込んで来ている。しかし、遊具の真のあるべき姿はこれで良いのか、テレビモニターの前でテレビゲームに嬉々としている現代幼児の姿に疑問を感じるこの頃である。

6. 結び

21世紀の時代に生きる人間教育は、時代の革新をする創造的人間を提唱するフローベルの思想に学ぶべきである。どんな時代が変わろうが我々はまず、自然に学ぶことが人間の基本であると思う。ところが、現代日本では自然破壊が進む一方で、大都会で生活する子供たちが安心して自然の中で遊ぶ所も遊ぶ余裕もない。環境問題が子供の遊具を規制している。かつての日本人は一般的に「物の心」物には心があると考えていた程、荘厳にそそり立つ高い山、樹齢を重ねた巨大な木、大地、巨大な岩、広大な海など大自然に神の御神体を見て畏敬し、自然に従い融合させて、あらゆる万物と共存共生してきた。この過去の忘れ去ってしまった日本人の自然観、人間も自然の一部であることを再確認すべきであると思う。また、現代の快活さを失なった子。これらの子供は自らを発見できず、それは大人になっても尾を引いている。そのことは自己存在の喪失であり、それは中心の喪失であると思う。ハンス・ゼーデルマイヤによって「芸術における中心の喪失」が叫ばれてから久しいが、私は確かな自己存在を認識し、自己の立っている足元が中心であると自覚できる中心のある人間を育てたい。その事は同時に大阪芸術大学を世界の芸術の中心にする事であると確信する。

参考資料

- ①「フレーベル教育学への旅」 荘司雅子著、茂木正年、宮崎尚 構成、日本記録映画研究所
- ②「フレーベルの教育学」 O. F. ボルノウ著、岡本英明、理想社
- ③「近代芸術の革命」 ハンス・ゼーデルマイヤ著、石川公一訳、美術出版社
- ④「Walter Gropius-Opera complete」 by W. Nerdinger

附記

この論文の執筆に、本学工業デザインコースの教授、山下明伸先生の御指導と建築学科の講師、杉本真一先生に御協力を戴きました事を厚く、お礼を申し上げます。